

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「アニキ」をリーダーとして「マル」とともに暮らしていた野生のシカの「おれ」（「サンカク」）は、冬の森の食べ物のとぼしさにたえられず、人里に食べ物を探しにいきます。人間に見つかってにげる途中、「アニキ」は車にひかれて命を落としてしまいますが、「おれ」は「マル」とともに必死にげ続けます。

おれたちは息を切らしながら、走り続け、四角い大きなものを見つけた。人間が作った建物なんだろう、というのはわかった。

「今夜はここで寝るか」入り口を見つけた。あまり大きく開かない。頭をぎゅつとおしこむようにして、おれはのぞきこんで、ハッとした。先客がいる。シカの仲間かと思ったら、違った。大きさはよく似ているけれど、もつと顔が長くて耳が大きくて、鼻の穴がでかい。足もとても太かった。

「あんた、だれ？」言葉が通じるかわからないものの、たずねてみた。

「ロバの、ウサウマ」ゆっくりとした返事が聞こえた。

「あ、おれはシカのサンカク。こっちがマル。ちよつと休みたいんだ」

10 「ああ、もうぼくダメ……」すみっこまで行つて、マルがへなへなとしやがみこんだ。

「つかれてるみたいだね？」

「人間に追われててね。あいつら、最低だ。アニキを殺しやがった」

「このあたりでは、シカは害獣なんだね」

「ガイジユウ？」

15 「人間にとつて、めいわくな生き物だつてことだよ。だから追いはらわれたり、つかまったりするんだ」

「ふうん……」

「昨日までいたところでは、人間とシカはともてうまくやっていたのになあ」

「へ？」おれは、聞き違いかと思つて、耳をぴきぴき動かして、ほこりや雪がついてたら振り落とそうとした。

20 「シカは、人間にもらつたご飯を食べてるんだ。もらうと、ありがとありがと、つて頭を下げるんだよ」
おれは鼻を鳴らした。

「そいつらは、どつかに閉じこめられて、一日中立つかしやがむか、それしかやることのない、かわいそうなやつらだろ？」

「ううん。自由だよ」

「そんな、まさか」

25 「ご飯をもらいたくなければ、自分で草を探す。そういうシカもいるみたいだよ」

「本当に食うものに困らないのか」

「みんな君よりは太っていたよ」

「そ、その場所はどこにあるんだ」

「太陽が夕方にしずむ方向」

30 「ああ」

「何日か、そっちに向かって歩いて行くと、奈良公園つてところに着くから。そこにいるシカは天然記念物つて呼ばれててね、人間にとつても大切にされてる」

①人間がご飯をくれて、仲良くできるところがある？ 信じられない。この目でどうしても見てみなくては。

35 出発するのがおくれたのは、マルがぐずぐずしていたせいだった。毎日出かける直前になって、「また雪が降りそうだよ」などと足を引っ張る。おれも、②ありつたけの勇気を振りしぼらなければ、この山をはなれて行くことなんてできない。だから、マルにそう言われると、つい先延ばししてしまったのだった。それに、角が抜けたのも大きかった。去年の春からゆつくりのびてきた、一本の角が、抜けて地面に転がったのだ。

40 この一年、角を武器に戦ったことなど一度もなかったのだが、心を守る武器ではあったのかもしれない。失つてから、果てしなく心細くなった。いや、この森にいる限りは、みんな同じ条件だ。でも、ナラコウエンはどうだろう？ まったく気候が違つて、あるいはそこに住むシカの種類が違つて、角は抜け落ちないかもしれないではないか。その地へ入りこんで行くなんて、無謀すぎやしないか？

45 山を上つて下つて、また上つて下つて、を何回くり返したかよくわからなくなつてきたところで、ついに山が近くに見当たらなくなった。青空の下に、大きな大きな林が広がっている。

そして、やつらは突然現れた。何頭も。寝そべったり、歩き回ったり、シカたちはみんな勝手気ままだ。おれらと同じように角が抜け落ちていてよかった。だからか、さほど怖さは感じない。

50 あんたら、どこから来た？ だれの許可を得た？ 最初は絶対からまれるだろうとかくごしていた。けれどふしぎなことに、③やつらは、おれたちをまったく気にしていないみたいだった。ちら、と視線を投げかけて来る

ことすらしないんだ。どうなってるんだ……。ナラコウエンってどこですか？ という質問を、おれは必死にガマンした。もしかしてここもナラコウエンなのかもしれない、という気がしたから。だとすると、おれたちがよそから来たバレてしまう。さらに林を進んでいくと、ちらほらと草が生えているのが見えてきた。

55 「食っても怒られないかな？」 そう言いながら振り返ると、マルは早くも、のびかけの葉っぱをばくつとかんでいるところだった。ようし、おれも。あいつ食い過ぎじゃねーか、とまわりのシカににらまれない程度に、のびた葉の先端をついばむように。

「あと少し、歩こう。シカの数が増えてきたな」

「話しかけられたら、なんて言えればいいの？」

60 「うーん、田舎者ってバレたくないな。じゃあ、あのあたりの木の下で休むか。作戦を練ってちよつと休んで、それから動こう」 かしおれたちらは、作戦を練る間もなく、うつらうつらし始めてしまった。

「サンカク、サンカクってば」

マルに起こされたとき、不覚にも太陽はとくにのぼっていた。

「ああ、ごめん」 自分で思ったよりもつかれていたようだ。立ち上がって、ふるふるとみぶるいして、目を覚まして、目覚まそうとして、

65 「ねえ、ちよつと見に来てよ。ぼく、さつき散歩してすごいもの見ちゃったんだ」 マルが先に立って歩き出す。

「なんだよ、すごいものって」

「仲間が人間にご飯をもらってるんだ」

「え！」 目は一気にさえた。マルにくつついて、その現場まで急いだ。

70 あのぼーっとしたロバが言っていたことは本当だった。人間が、丸っこいものを手に持っている。それをシカが首をのびして受け取り、おじぎをしてから食べているではないか。そんな風景が一カ所だけではない。あちこ

ちでくり広げられているのだ。おれは、ふらふらと近寄った。マルがささやいてくる。

「やつぱり、あれ、ためしてみたいよねえ。きつと相当おいしいんだろねえ」

「でも、決まりがあるのかもな」

「決まり？」

75 「このグループは、この人間から受け取る、みたいな決まりが」

「じゃあ、ぼくたちは？ どうやったら食べられるんだろねえ」

「わかんねえ」

「わかんないの？ 何が？ 質問なら、ボクのわかる範囲ならなんでもお答えするよ」

不意に、会話を割りこまれて、おれたちは同時にその声のほうへ鼻を向けた。

80 「やあ」 オスのシカがいた。毛並みがよくて、おれたちよりも体重がある。鼻筋が通っていて、気品があった。だれかを警戒してビクビクしたことなど、一度もなさそうな態度だ。

おれひとりがビクビクしているのもくよくよく、なるべく普通にしゃべろうと心がけた。

「いや、この丸いのはおいしいのかな、と思って。実はあのへんの奥に住んで、こっちまで出てこなかったから。今まで食べたことないんだ」

85 不自然だったろうか。しかし、相手は警戒する様子もなく、あっさり納得してくれたようだった。

「ああ、林のほうに住んでたの？ 静かでいいらしいよねえ。こっちはにぎやか過ぎてイヤだっていう仲間も多いよ。まあ、ボクは全然苦にならないんだけどね。自己紹介してなかったね。ボクの名はフレンドリー」

フレンドリー？ なじみのない発音だ。

90 「英語でね、親しみやすい、っていう意味なんだ」

「英語……？」 とんでもないところに来てしまったような気がする……。よほど頭のいいやつでなければ、ここにはいられないのかもしれない。

「あ、ごめんごめん。それより、シカせんべいの味について聞きたかったんだよね？」

「シカせんべい？」

95 「そう。この丸くてうすっぺらいやつ。そう呼ばれてるんだ。人間は食わないの。ボくらだけのために作られてるんだよ。味はね、うーん、そうだなあ。ぜいたく言わなきゃ、まあ、そこそこのおやつ。腹はふくれるしね。」

だから、冬は草を探しに歩きまわるより、もらったほうが手っ取り早いだろう？ それでみんな、ここでシカせんべいを買う人を待ってるわけなんだ」

「じゃ、新参者[※]が入りこんじゃいけないね」

「ここには細かいしきたりなんてないよ。ただ、シカせんべいをもろうのには、ルールがあるから、それさえ知っておけばいいだろう。やあ、久しぶり！」現れたよそのシカに、フレンドリーは明るくあいさつしている。知り合いが大勢いるらしい。朝日を受けて、茶色い目は明るくおどっている。④それがおれにはまぶしすぎた。とりあえず、いったんどつか行つて、出直そうか。マルにそう話しかけようかと思つたが、

「ルール、教えてくれる？」マルは、目をきらきらさせながら聞いている。

「うん、ここナラコウエンは有名なところだね。遠くから遊びに来た人間は、シカと仲良くしたくて、シカせんべいを買うんだ。あちこちで、ほら、売ってるだろ？ でも、積んである束を食べちゃだめ。まして売ってる人をおそつたりしたら、論外。せんべいを買った人間だけから、もらうんだよ」

「わかった」

「あと、せんべいを持ったまま、もったいぶってなかなかくれない人間がいても、怒っちゃだめだよ。ちよつと鼻でつくくらいはいいけどね。もらった後、ありがと、つておじぎをすると喜ばれるよ」

「喜ばせたほうがいいの？」

「もう一包み、せんべいを買おうと思うかもしれないだろ？」

「ようし、やつてみる。ね、サンカクもやるよね」

⑤「あ……ああ」おれはあいまいに答えて、立ちつくしていた。マルはフレンドリーにくつついて、ずんずん進んで行く。さわいでいる人間のもとへ、さつそく二頭は行つて、食べる前からおじぎしている。

せんべいの味を知りたい。でも、もつと知りたいことがあつた。なんでこうも違うんだろう。ここだけは、なぜ。マルがせんべいをくわえたままもどつてきた。それをおれの足元に置く。

「一枚、もつてきたよ」

「おう、ありがとう」おれは土の上に置かれたそれを、ふんふんとかいだ。悪いにおいはいししない。いいにおいもしない。かじつてみると、それはパリ、と音を立てて割れた。

「うまいのか、まずいのかわかんない」

「米ぬかと小麦粉、つていうのを使つて人間が作ってるんだつて」

「フレンドリーがそう言つてたのか」

「うん、ほんと何でもよく知ってるよね、かれ。ぼくとサンカクのグループに入つてくれないかな？ ボスになつてもらつてどう？」と声をはずませている。おれが返事をしないことに気づいて、マルは話題を変えた。

「でもさ、これがあれば、冬だつて食べ物がなく死ぬ心配はもうないんだね」

「ああ」故郷には、まだ雪は積もっているだろうか。飢え死にした仲間がいらないことを願う。

「ねえ、駅のほうまで行つてみない？ フレンドリーが案内してくれるつて」

「駅？」

「人間がたくさんいるとこだよ。そこでまずシカせんべいを買う人間が多いから、一番たくさんありつけるつて」

「そんなに腹、減つてないから」

「じゃあ、後でまた待ち合わせしようよ。けさ寝てた木の下でいいかな？」

「いいよ」

「じゃあねつ」マルは小走りに、フレンドリーのところへ寄つて行き、

「走っちゃダメだよ。人の多いところではさ」とたしなめられて、「えへー、ごめん」と笑っている。

なんでおれは、はしやげないんだろう。こんなにつかれてるんだろう。風の運んでくるにおいが、山のなかとは全然違う。こうばしいような、こげついたような。食欲をそそるような、なくすような。ぼんやりしているうち、いつの間にかおれは小さい人間に囲まれていた。背中に手を置かれる。なでられる。つねられる。「カーイ」と、こいつらはしきりに言っているけれど、フレンドリーが訳してくれなきや意味なんてわからない。

おれは石。おれは河原のでっかい石。そう念じて、ひたすら固まつた。きつとじきに慣れるさ。たくさん人間にも、ルールにも。だつて、母さんからはなれた後も、しばらくは不安で仕方なかったのに、あの後すっかり森に慣れたじゃないか。新しい環境^{かんきやう}に体がついていくのに、マルより時間がかかるだけなんだ。

⑥おれは固まつたまま、ため息をひとつついて、目を閉じた。

予想したとおりだった。⑦おれは慣れた。ほぼかんべきに慣れた。春が過ぎ、夏になると、どこも草だらけになつて、食べるのがいそがしくなつた。それでも、一日一時間くらいはマルとフレンドリーに付き合つて、シカ

せんべいをもらっておじぎするボランティアをやっていた。冬の間はそこそこありがたかったせんべいも、この時期になるとみりよくはない。香りが足りないんだと思う。若草を食べるときは、ふわっと命の香りがたようんだけど、それが、せんべいにはまったくないんだ。それでも、人間との暗黙の年間契約だから、とフレンドリーは言う。春も夏も秋も、せんべいをちゃんといただくから、冬ももらえるんだ、と。もっとも、せんべいをまったく食べずに芝生ばかり食べていても、それはそれでいいみたいだ。人間は、草がぼうぼう生えてる状態を好まないらしい。シカが片っぱしから食べることで、整備する手間がハブけるって喜んでるのだそう。

フレンドリーがあちこち引き合わせてくれるおかげで知り合いも増えて、このナラコウエンについての知識も増えてきた。⑧ここに住んでいるシカは、あのロバが言った通り、天然記念物と呼ばれていて、野生のシカと種類は変わらないのに、大切にされている。大昔、「神様」っていう、人間のボスみたいなのをシカが運んできたの言い伝えがあって、他の生き物とは違うえらい動物なんだ、とあがめられるようになったらしい。本当にそうなのかなぞだ。⑨少なくとも、シカの間では、そんな言い伝えはない。

秋が近づくと、のんびりしたふんいきが変わってきた。オス同士、こぜり合いがちよくちよく起きて、角と角をつき合わせてるやつらも現れた。おれとマルの角は、二股に分かれ、去年よりは迫力が出てきた。でも、せんぱいたちに比べるとまだまだで、結局、メスの集団にはまったく近づけなかった。フレンドリーですらダメだったのだから、仕方ない。でっかい角のオッサンたちが、独占していた。あと二年、三年くらいして、おれたち自身がオッサンになるのを待たないようだ。

故郷に残っていたら、チャンスはあっただろうか。あつたかもしれない。たぶん、ナラコウエンのシカたちよりも、寿命が短くて、だから若いやつにもチャンスがあるんだ。でも……そのくらいしんぼうしよう。だって、飢え死にする心配がないというのは、やっぱり大きいから。がまんできる。ここでの生活をそれなりに楽しめる。そう思っていた。あの日が来るまでは。

林の入口でねむっていたおれのもとに、フレンドリーとマルがかけてきた。めずらしいことだ。二頭はいつだって、にぎやかなところにいるのが好きはずなのに。

「サンカク、大変だよ」マルの目が情けないほど細くなっている。

「何が」おれは、やわらかい草のじゅうたんの感触をもう少し味わっていたくて、寝そべりながらたずねた。

「まあ、毎年のことなんだがな。一年で一番めんどくさい時期が来ちゃったってこと。でも、人間との契約だから仕方ないんだよ」フレンドリーがいつになく早口で、はき捨てるように言う。

「なんの話？」ようやくおれは起き上がった。そして、遠くからドドドドという音やら人間のかい声やらが聞こえてくることに気づいた。ドドドドはきつと太鼓だ。夏にも聞いた覚えがある。

「角切りだよ。何頭か仲間がつかまった」

「なに、角切りって」

「ボクたちの角、のび切ってるだろ？ 人間を刺すと危ないからさ。秋になるといつも、人間は角を切るんだ。それを祭りにしてる」

「祭り？」

「たくさんの人間が見物に来るんだ。あれ、ほんと怖いんだ。去年、運悪くつかまってさ。最初はボクたちを囲いの中で走らせる。そのうち、角に長いなわを巻きつけて、つかまえて、ごりごりと刃物で角をそぎ落とすんだ」

「なんてひどいことを」

「祭りで、たくさんの人間に囲まれて角を切られるのは今日と明日とあさってだけさ。にげるのは難しくない。でも、他のシカたちもみんな、後で麻酔をかけられるんだ」

「麻酔って？」

「チクッとしたら、すぐねむくなって、寝ちやうんだ。で、目が覚めたら角がない」

「そんな、**b** オウボウな……」

「毎年そうなんだ」

「角をうばわれるなんて、オスとしてこんなにはずかしいことはないじゃないか」

おれの勢いに、マルが目まばしっぱし瞬かせてとまどっている。フレンドリーはたんたんと答えた。

「そりや、サンカク一頭が切られたら、みっともないよ。でも、角を持つてるオスは全員切られるんだ。みんなで切られたら、そっちが普通になるんだよ。やられないのは、メスだけさ。角がもともとなないからね」

「フレンドリーはそれでいいの？ 角がなくなるなんて……」

おれたちがここへ来たのは、冬の終わりがけだ。野生のシカはみんな、角が抜けて生え替わるときだった。だから、ナラコウエンのシカももちろんそうなんだと思っていた。もっともっと前に、人間に切られてたなんて、

想像もしなかった。

「⑩ 本当ならありえないだろうね。でも、初めて角が生えたときから、毎年だからなあ。慣れちゃった。切られた後は頭が軽くて楽になるし。それに、大事なルールなんだ。ここで生活するための。もし角で人間をcキズつけちゃったら、収容所行きだからね」

収容所。病気やケガのシカ、人間が作った草を食ってめいわくをかけるシカ、そいつらが入れられる場所なんだと聞いた。そう、⑪ 神様の動物にも、例外の害獣はいるってことだ。

「どう思うんだ、マルは。切られること」

「そりゃイヤだよ」マルは落ち着きなく、かりかりと前足で地面をかいだ。

「でも、仕方ないよね。チクツとするの、怖いんだけど、ねむってる間に切られるなら痛くないんだろうし。だったら、平気だよ」

「痛いからイヤだとか、痛くないから平気だとか、そんな話をしてるんじゃないんだよ！」おれがどなると、マルは答えず、地面をはっていく小さな虫を見つめていた。フレンドリーは芝生をはむはむ食べ始めた。

アニキならどう言うだろう。人間をあなどるなよ。人間の作るルールは想像以上にdキビしいんだ。それに従えるか？ 森の奥で気ままに育ってきたこのオレたちが。そんな声が聞こえる気がする。

おれは立ち上がった。

「行くよ」

「え、どこへ？」

そうたずねるマルの顔を見つめた。二股に分かれた角は、しもぶくれの顔には似合わずいかめしい。同じ形の角が、おれの頭にも乗っている。自分では見えないけれど。

「元いたところへ」

「え、あの森へ？ あんな遠くまで？」

「いや、そこまでは行かないかもしれない。途中のどこか落ち着ける森で、生活するよ」

フレンドリーがため息をついた。
「そうか、君ら、そんな遠くから来たんだね。⑫ ボク、そういう世界も見たいなあ。でも無理。ナラコウエンに守られてるって自分でもわかってる」

わああ、と遠くで人間の叫び声と手をたたく音が聞こえてきた。フレンドリーがおれとマルを交互に見た。
「マルも行くの？」

ググ、と口元から変な音を出して、マルはうつむいた。

「行かないよ」と、おれが代わりに答えてやった。

「マルは、フレンドリーのそばにいるのが合ってるんだ」

「ずっと、いっしょに生きてきたのに……サンカク」声をしぼりだすように、マルが言う。聞いていると泣きそうになって、⑬ おれは耳をすまして、太鼓の音を聞いた。どうしてもたえられない、と自らを奮い立たせる。

「すぐそこの山に住むかもしれない」おれが言うと、マルはうなずいた。

「そうだね！ 冬の寒い時期だけでもどつてくるといいよ。そしたら、意外とすぐにまた会えるね。ね、ね？」

「そうだな。おれの角が抜け落ちた後なら、区別つかなくなる。そのころ、君らの顔を見に来るのもいいな」

「いいね！ シカせんべい、いっしょに食べよう。約束だよ」

「ああ」⑭ おれは立ち上がった。芝生におれの黒い影がうつる。長い角を振り上げた。影も動いた。

「また、近いうちに。じゃあ」

「じゃあ」

二度と会うことはないだろう。マルだってフレンドリーだって、心の底ではわかってるはずだ。天然記念物と害獣。分かれ道は、あまりにはつきりと方角が違って、行ったり来たりなんてできない。

⑮ おれは今日から、害獣に帰るんだ。

(吉野万理子『ロバのサイン会』より)

〈語注〉※① 無謀…行動するときに後先を考えないこと

※② 新参者…新しく入って来た者

【設問】 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線 a 「ハブ」(151 行目)、b 「オウボウ」(187 行目)、c 「キズ」(198 行目)、d 「キビ」(208 行目) のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 線 ① 「人間がご飯をくれて、仲良くできるところがある？ 信じられない」(33 行目) とありますが、「おれ」がこうに思うのは、どのようなことがあったからですか。説明しなさい。

三 線 ② 「ありったけの勇気を振りしぼらなければ、この山をはなれて行くことなんてできない」(36 ～ 37 行目) とありますが、「おれ」がこうに思うのはなぜですか。説明しなさい。

四 線 ③ 「やつらは、おれたちをまったく気にしていないみたいだった」(49 行目) とありますが、「やつら」が「おれたちをまったく気にしていない」のはなぜですか。46 ～ 106 行目をよく読んで、説明しなさい。

五 線 ④ 「それがおれにはまぶしすぎた」(101 行目) とありますが、「おれ」が「フレンドリー」を「まぶしすぎ」ると感じるのにはなぜですか。説明しなさい。

六 線 ⑤ 「『あ……ああ』おれは……ずんずん進んで行く」(113 ～ 114 行目) とありますが、この部分から「おれ」と「マル」とのどのような違いがわかりますか。説明しなさい。

七 線 ⑥ 「おれは固まったまま、ため息をひとつついて、目を閉じた」(142 行目) とありますが、この時の「おれ」の気持ちはどのようなものですか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分を取り囲んで体にさわってくる上に、意味のわからないことを言っている小さい人間たちに腹を立てつつも、奈良公園で暮らしていくためにはがまんしようと決意している。

イ 奈良公園に来てからは、新しいことが次々に起こり、気を張って対応していたら体がつかれてしまったので、しばらくじっとして休むことが自分のためには大切だと思っている。

ウ 人間に囲まれて奈良公園で暮らすことにはまだなじめないが、以前も母とはなれて暮らすのに慣れるまで時間がかかったので、今は何も考えず、時がたつのを待とうと思っている。

エ 奈良公園でめぐまれた暮らしをしているとつい忘れてしまいたいような気がするが、故郷の森で飢えている仲間を思うと胸が痛くなるので、仲間の無事をいのような気持ちになっている。

八 線 ⑦ 「おれは慣れた。ほぼかんべきに慣れた」(144 行目) とありますが、「おれ」はどのような生活に「ほぼかんべきに慣れた」のですか。144 ～ 165 行目をよく読んで、説明しなさい。

九 線 ⑩ 「本当なら慣れちゃった」(197 行目)、——線 ⑫ 「ボク、そういう世界も自分でもわかってる」(219 ～ 220 行目) とありますが、これらの部分からは、「フレンドリー」がどのような思いをいだきながら「ナラコウエン」で暮らしていたことがわかりますか。説明しなさい。

十 線 ⑧ 「ここに住んでいるシカは大切にされている」(153 ～ 154 行目)、——線 ⑨ 「少なくとも、シカの間では、そんな言い伝えはない」(156 行目)、——線 ⑪ 「神様の動物にも、例外の害獣はいるってことだ」(201 行目) とありますが、これらの部分からは、「おれ」の「人間」に対するどのような思いが読み取れますか。説明しなさい。

十一 線 ⑬ 「おれは耳をすまして、太鼓の音を聞いた」(227 行目) とありますが、(1) 「太鼓の音」は何が行われていることを示すものですか。文中から三字で抜き出しなさい。(2) 「太鼓の音」を「おれ」が「耳をすまして」聞いたのはなぜですか。説明しなさい。

十二 線 ⑭ 「おれは立ち上がった。影も動いた」(232 行目) とありますが、この時の「おれ」は、自分の「影」を通して何を見ていると考えられますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 野生のシカとしてほこりを持って生きていた、かつての自分の姿。

イ 野生のシカとして生きることにおびえている、実は弱い自分の姿。

ウ 野生のシカとして生きるべきなのか、思いなやんでいる自分の姿。

エ 野生のシカとしてたくましく生きていく、本来あるべき自分の姿。

十三 線 ⑮ 「おれは今日から、害獣に帰るんだ」(237 行目) とありますが、「おれ」が「害獣」に帰る決意をしたのはなぜですか。本文全体をふまえて説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

